◉【COC＋事業】「地域インターンシップ入門」 業界研究バスツアー

保育、行政、小売・サービスの３種の業界研究バスツアーを実施しました

2017年2月に保育編、宇治市役所編、小売・サービス編の３コースで業界研究バスツアーを実施しました。平安徳義会、宇治市役所、㈱伊藤久右衛門、㈱イノブンの各事業所の仕事を見学し、職員や経営者とのディスカッションを通して職場の生の声に耳を傾けました。学生は、その場に行かないと分からないことを感じ取り、職員や社員の方々に積極的に質問していました。このバスツアーでは事業所を訪問した後、本学で事後研修を行います。研修の中で1年次生から、「大学では就職が決まることがゴールで、その先は考えていなかったけど、卒業してからがスタートだと思いました。」という感想もあり、訪問の前後で働くことへの意識や考えが変化するバスツアーとなっています。

◉【COC＋事業】 京都文教ともいき意見交換会

「人・地域・事業所が育つには」をテーマに意見交換会を実施しました

3月3日(金)に「ともいきパートナーズ」の活動に先駆けて、「京都文教ともいき意見交換会」を開催しました。本学からCOC・COC+の取組を説明した後、地元行政・団体である宇治市や城陽市、京都府山城広域振興局、そして京都中小企業家同友会伏見支部などの皆様と本学職員が「人・地域・事業所が育つには」をテーマに活発な意見交換を行いました。地域をつなぐ人財の不足や女性が働く環境など課題は多岐にわたり、その解決にとって地域の役割が重要であることが提起されました。参加者が日頃思っている地域課題を共有し、課題解決に向けたアイデアの発表をすることは、それぞれの組織・団体が新しい視点を持つためにも有意義だとの声もあがっています。今後、意見交換会の開催だけではなく、課題解決へ向けて行動も伴った取組を目指していきます。

◉ 地域連携学生プロジェクト成果報告会

地域課題に取組んだ、学生たちの成長が見られる発表会でした

3月2日（木）、本学にて今年度の地域連携学生プロジェクトの成果報告会が開かれ、本年度採択された4プロジェクトが、活動の成果と課題を発表しました。

「子どもの農業体験応援団」は、近畿農政局と京都市伏見区にあるはなぶさ保育園と連携し、園児たちと田植えや稲刈りを体験し、食の大切さを伝えました。今年で7年目の「宇治☆茶レンジャー」は、学生の学びを直接参加者に伝える聞き茶巡りツアーを実施。新たな取組にチャレンジする姿勢が評価されました。宇治橋通り商店街と連携し商店街の更なる活性化に取組む「商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas」は、「宇治ロゲイニング」を中心に、独自企画、商店街イベントへの参画、通年通した商店街広報支援について発表しました。宇治を舞台としたアニメ作品「響け！ユーフォニアム」を通して、アニメファンと地域とを繋げる活動を行う「響け！元気に応援プロジェクト」は、多数のイベントを活発に行う姿勢が評価されました。

◉「伏見桃山・中書島ゆらふプロジェクト」による観光キャンペーン!

本学・伏見7商店街・伏見観光協会・京都市（伏見区・産業観光局・交通局）が協働し、伏見の観光振興に取組んでいます。

3月12日（日）に京都駅にて、「伏見桃山・中書島ゆらふプロジェクト」による観光PRキャンペーンを実施しました。本プロジェクトは昨年度より、15回の会議を重ね、伏見の魅力発信と交通ネットワークの充実を通じた観光振興に取組んでいます。今年度の活動の一環として、国内外で注目度が高い「日本酒」をテーマとし、古くから酒蔵のまちとして、酒づくりが盛んな伏見の魅力を発信するため、マップ作成と観光PRキャンペーンを行いました。キャンペーン当日には、マップ配布に加え、日本酒の試飲や学生たちによる伏見の魅力聞き取りアンケート調査を実施しました。

京都文教大学 地域協働研究教育センター
ニューズレター「ともいき」vol.10（2017年3月発行）

発行：京都文教大学地域協働研究教育センター

【お問合せ】
京都文教大学フィールドリサーチオフィス
〒611-0041　京都府宇治市槇島町千足80　TEL：0774-25-2630　FAX：0774-25-2822
E-mail：fro@po.kbu.ac.jp　URL：http://www.kbu.ac.jp/kbu/　京都文教大学

京都文教大学　文部科学省 地(知)の拠点　文部科学省 地(知)の拠点

京都文教大学 地域協働研究教育センター

ニューズレター ともいき TOMOIKI vol.10

2017年3月発行

「京都府南部地域 ともいき（共生）キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えします。

京都文教大学COC事業

「中間報告シンポジウム・パネルディスカッション（公開型外部評価委員会）」開催

2017年2月10日（金）に実施しました。

本学は、平成26年に文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」の採択を受けました。「京都府南部地域ともいき（共生）キャンパスで育てる地域人材」をテーマに、大学のリソースを地域の発展に、また、地域の力を大学教育へ活かして、大学と地域がともに発展していけるよう、宇治市、京都市伏見区と連携して様々な取組を行っています。

2月10日（金）、採択から3年となった本事業の中間報告の機会として、「COC事業中間報告シンポジウム」を開催しました。当日は、終日盛りだくさんのプログラムで、これまでのCOC事業を振り返り、これからの取組について考える機会となりました。

研究成果報告会の様子

■ 当日のタイムスケジュール

10:30 ～ 12:00　ともいき研究成果報告会（全20件）
12:00 ～ 13:00　休憩／地域連携学生プロジェクト活動ポスターセッション
13:00 ～ 14:30　COC事業中間報告会
14:45 ～ 15:45　パネルディスカッション（公開型外部評価委員会）
16:00 ～ 17:00　京都府南部地域まちづくりミーティング
（同時開催）　外部評価委員会（非公開）

中間報告シンポジウムの様子

午後からの「COC事業中間報告会」では、教育・研究・社会貢献それぞれの事業について、担当教員よりご報告するとともに、各事業に携わった学生、行政、企業、地域の方々にご登壇いただき、生の「声」を頂戴しました。

事業報告の後、初の試みとして公開型外部評価委員会をパネルディスカッション形式で行いました。連携自治体の宇治市長、京都市伏見区長や他大学学長ほか計8名の本学COC事業外部評価委員の方々にご登壇いただき、約3年の取組について一定の成果の評価を頂くとともに、残り2年の事業終了後を見据えての予算の獲得や事業体制の整備について貴重なご意見を頂戴しました。

なお、今回は外部評価委員のみならず、本シンポジウムにご参加頂いた地域の皆さまからの評価を頂くために、「評価アンケート」を実施しました。また、直接ご意見を頂く機会として、「京都府南部地域まちづくりミーティング」を開催しました。約60名の方にご参加いただき、本学COC事業の教育・研究・社会貢献・事業全般について、評価できる点や改善点、提案事項等、自由に意見交換を行いました。

次項以降、教育・研究・社会貢献のこれまでの取組と、外部評価委員・地域の皆さまからいただいた評価、ご意見をご紹介します。

地域インターンシップ受入先からの「声」

■ 本学COC事業外部評価委員

役職等	氏名
松本大学　学長	住吉　廣行　氏
鳴門教育大学　学長	山下　一夫　氏
龍谷大学　短期大学部　教授	加藤　博史　氏
名古屋学院大学　現代社会学部　教授	水野　晶夫　氏
宇治市長	山本　正　氏
伏見区長	久保　宏　氏
宇治商工会議所　副会頭	小山　茂樹　氏
京都中小企業家同友会　南部地域会	小山　和幸　氏

公開型外部評価委員会の様子

まちづくりミーティングの様子

京都文教大学COC事業

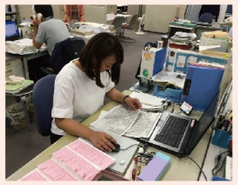
教育

地域のことを知り、地域で学び、そして地域で活躍できる「ともいき人材」の育成を目標に、地域を切り口に普遍的なテーマや課題について学ぶための教育カリキュラムと環境を提供しています。

■「地域入門」をはじめとした地域志向科目の実施

平成27年度より新規開講した１年次生全学必修科目の「地域入門」では、地域を志向した学習の動機付け、関心喚起を目的として、様々な地域・連携自治体の事例紹介や、学部の専門性と地域志向の関係性について講義を実施しました。最終日に実施した授業アンケートでは、受講生の８割近くが授業に対して高い満足度を示し、９割が「地域」についての理解が深まったと回答しており、学生の地域志向の基礎を築く科目となっています。これらの学びは、２年次以降の選択必修科目（教育福祉心理学科を除く）「現場実践教育科目」として新設開講された「地域インターンシップ」「地域ボランティア演習」「プロジェクト科目（地域）」や学科の専門科目における地域での実践活動へ有機的に接続をしています。

■ 地域インターンシップ



在学中に自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を行い、高い職業意識の形成や人材育成を目的に、本学独自の地域密着型プログラムとして、2年の試行を経て、平成28年度より開講した科目です。宇治市や京都市伏見区の自治体・企業等を中心に19ヶ所の事業所で20名の学生が実習生としてお世話になりました。定員(30名)充足を目指し、今後は学部の学びをより意識した特色ある実習先の拡大を図るとともに、今年度より参画しているCOC+事業で展開する課外プログラムとの連動・接続を推進します。

■「地域志向科目」における教育評価の実施・検討

「地域入門」では、授業アンケートを実施するとともに、平成28年度より4つの項目（①関心・意欲、②認識・理解、③問題意識・思考、④準備・計画）を4つの段階（レベル１～４）で評価する学習ルーブリックを導入し、学習到達目標の共有、学習意欲向上の促進を図りました。

「関心・意欲」の項目において、初回授業では自ら地域に関心を持ち、地域課題の発見に努める意欲を持つ学生が26.5%でしたが、最終回授業時には、65.2%まで増加しました。他の項目でも、学生の地域への認識が深化したことが読み取れ、「地域入門」が目指す地域志向学習への導入・動機付けという目標は達成できたと考えられます。

学生からの声

「地域入門」は、様々な地域の現状と課題を知り、「自分の住んでいる地域、大学周辺の地域はどうだろう」と改めて考えるきっかけになりました。また、授業の中で卒業生の方々が、大学の学びを地域にどのように活かしているかというお話をしてくださり、自分の将来をイメージすることができました。

「地域インターンシップ」では、観光協会の仕事を体験する中で自分の足りないところを改めて感じ、これからの学生生活について考え直すことができたので、２年次で受講できたことがよかったなと思います。

総合社会学部 2年次生　兼井茜

【外部評価委員からの評価・コメント】

- 「地域志向科目」における教育評価について、ルーブリックと自己評価アンケートを実施したことは評価できる。今後これらを改訂していくことになるが、これを用いて学生の省察を促すことができるように教員が指導できるか、そして学生の評価疲れにも気を配る必要がある。
- ルーブリック・自己評価アンケートにより、教育的成果の可視化が行われたことの意義は大きい。簡略化されたルーブリック・ワークシートを使用しており、現場サイドにたった有用な利用法だといえる。
- 様々な地域から通う学生が「地域」を自らに置き換えてもらうためにも、幅広い視点で地域を考察するプログラムが今後も必要。全てに於いて昨年より成果が出ていると思う。(寄付講座について)責任のある方々と現状に対して直接交流することは地域を学ぶには大変有効。中小企業協働型も進めていきましょう。

京都文教大学COC事業

研究

地域課題解決のため、大学教員の専門性を活かし、地域のパートナーとして住民、行政、企業、各種団体の皆さんと「協働」した実践的な研究に取組んでいます。

■ 地域志向共同研究（ともいき研究）の公募、実施

「ともいき研究」※では、学内のみならず学外からも研究を公募し、本学教員とのマッチングを行うことで、共同研究を行っています。地域の方々が課題と感じている事項や、大学と協働したいと考えている事項を把握する機会ともなっています。研究会への参加者も年々広がりを見せ、平成28年度は、本学教員の約4割が共同研究に携わりました。

研究と教育の接続、研究成果の社会への還元について、引き続き検討を行っていきます。

	地域志向共同研究件数	研究参加者延べ数（内本学教員数）
平成26年度	11	58（37）
平成27年度	20	117（58）
平成28年度	20	137（64）

※ともいき研究：大学COC事業「地域志向教育研究　ともいき研究助成事業」、地域協働研究教育センター「地域志向協働研究」の総称

■ 研究成果の還元・研究成果報告会の実施

地域課題を研究会外の方と共有し、研究成果を地域へ還元するために、各研究会による「ともいき講座」（公開講座）やまちづくりミーティングを開催しています。また年度末には、研究成果報告会を開催し、全共同研究の報告を行っています。平成28年度は、2月10日(金)の午前中に、＜福祉＞＜子育て支援・教育＞＜コミュニティ・防災＞＜観光・まちづくり・産業＞の4会場に分かれ、20の共同研究プロジェクトが研究成果を報告しました。本学教員と共に研究を行う地域の方をはじめ、各テーマに興味をもたれた一般参加者など、のべ約140名の参加がありました。

地域からの声　学生からの声

「まきしま絆の会、宇治市、京都文教大学が紡ぐ地域連携の創造
－地域と結びつく親と子の絆づくり、子どもへの学習支援－」地域パートナー

Reos槇島　櫃田尚美さん

学生さんや先生方の一生懸命な指導に、子どもたちもとても楽しんで参加していますし、保護者の方も、安心して子どもたちを預けられると仰っています。この取組を行う中で、保護者の方から色々お話を伺い、ニーズに合わせて今年からReos槇島で新しい事業を始めることになりました。研究をきっかけに、槇島に新しい風を吹かせたいな、と思います。

この取組に参加して、当事者の方と接する中で認知症のイメージが変わりました。当事者の方と関わらなければ、実際のことを知ることができなかったと思います。その経験から、相手とどう関っていくかという積極性が大切だということを学びました。

「宇治市認知症アクションアライアンスに関する当事者研究」参加学生
臨床心理学部 3年次生　鈴木真結

【外部評価委員からの評価・コメント】

- 向島ニュータウンの再生・活性化に向けたビジョンづくりへ研究会としてご尽力いただき、3月にはビジョン策定の予定となっている。ビジョン策定後からがいよいよ本番。持続性のある取組を区役所と大学の協働で進めていきたい。
- 「ともいき研究」として、20研究が展開されており、高い研究意欲の現われと考えられる。そして、さまざまな機会を積極的に仕掛けて、住民や地域組織とのフィードバック・サイクルを活発化されていることにも高い評価が与えられてしかるべきである。そのうえでさらなる発展を願って、各研究の全体関連性をさらに明確に捉えていくこと、学内レビューを行い研究の水準を保つこと、各専門学会等への発表に耐えうる学問的研究水準に向かうことを目指してほしい。

京都文教大学COC事業

社会貢献

地域住民の「生涯教育力の向上」による地域活性化を目指し、大学のシーズを活かした取組を実施しています。

■ 京都府南部地域まちづくりミーティング

地域、行政、企業、学生、教職員など、さまざまな立場の人々が集まって地域の課題やニーズを共有し、課題解決に向けて話し合う場として、平成25年度から開催しています。本年度はテーマを絞ったミーティングも実施し、また2月10日(金)には、地域の皆さまのCOC事業についての評価・ご意見をいただく場として開催しました。（いただいた評価・ご意見はP. 5参照）

■ 小・中・高大連携事業

小学校教員養成課程の必修科目として開講している「学校インターンシップ」の他、「地域ボランティア演習（学校支援コース）」等において、地域の小・中学校と連携し現場の学びの場を得ています。また地域志向研究「官学連携による『宇治学』副読本作成と現場での活用に関する研究」では、宇治市教育委員会と連携し、宇治市内の小・中学校で使用する「宇治学」副読本の作成に取組んでいます。

■ 公開講座

本学の専門性を活かした「京都文教公開講座」や、「ともいき研究」を基盤とした「ともいき講座」、学外公開講座、セミナー等を開講した他、京都市伏見区の事業である「伏見連続講座」への講座提供や、京都府からの委託事業として「宇治茶文化講座」等を企画実施しています。今後、地域課題・地域ニーズに即した講座の増加、講座受講をきっかけに、教育や研究、社会貢献活動等の様々な活動への参画につながる仕組みづくりを検討します。

■ 宇治市高齢者アカデミー

平成25年度より、本学と宇治市が連携し、宇治市在住の高齢者を対象に学びの機会を設け、高齢者の社会参加、生きがいづくりに寄与するとともに、地域社会に貢献する人材養成を目的に開講しています。受講者からは大変高い満足度を得ており、平成28年度より年齢要件の引き下げ（65歳以上を対象）と京都文教短期大学からも科目提供を行い、幅広いニーズに対応できるよう取組みました。

地域からの声　学生からの声

（「官学連携による『宇治学』副読本作成と現場での活用に関する研究」について）
全国的に先駆けとなる、総合的な学習の時間で使用する副読本の作成に取り掛かる際、理想・理念はあったのですが、正直にいうと、暗中模索状態でした。大学の先生方と協働し、共に考えていけることは、大変強力な後ろ盾をいただいたと感じております。

宇治市教育委員会
教育支援センター
辻 弘一さん

大学に通ったことがなく憧れを抱いており、入学を待ちわびていました。学生さんと一緒に講義を受けることが楽しく、期末課題も、教職員の方々の力をかりながら取組みました。地域のイベントにも学生さんと共にスタッフとして参加し、大いに大学生活を満喫しています。

宇治市高齢者アカデミー4期生
谷口 萬智子さん

宇治市高齢者アカデミー2期生（卒業生）
平野 玲一さん

ただ講義を受けるだけではなく、学生さんたちとの交流も盛んに行いたいと、在学時から様々な企画を行っています。また、アカデミー生は卒業後、それぞれの地域に戻り様々な活動をしています。地域と繋がるきっかけを生み、高齢者の生きがいとなっているこの事業を長く続けていってほしいと思います。

【外部評価委員からの評価・コメント】

- （小・中・高・大連携事業について）大学と行政との協定が新しい連携活動を産み出している。学生の活動が、現場の若手教員に対するエールにもなって いることは素晴らしい。
- 宇治茶文化講座について大いに評価したい。伝統産業(農業)の周知になっている。
- （高齢者アカデミーについて） 昨年度の発展方策について宇治市と連携して改善されている。 事業の周知課題については今後検討を要する。

京都文教大学COC事業

地域からの評価

COC事業の中間報告を行うにあたり、これまで共に取組を行ってきた地域の方々や、この日初めて本学の取組をお聞きになった学外の方より評価、ご意見を頂戴するため、「評価アンケート」を実施するとともに、「京都府南部地域まちづくりミーティング」を開催しました。

■ 評価アンケート

教育・研究・社会貢献それぞれの報告をお聞きいただき、下記の評価基準に基づいて評価をいただきました。

＜教育＞ 75点

● 地域入門によって地域ブランドに関心をもった学生が出てきている。その意味で、プロジェクト科目の企業連携型を増やしていくことが必要。
●（地域入門について）「学生への学習の動機づけ」が徹底されている。

＜研究＞ 77.6点

● 研究報告を伺っていると大学として地域関係諸機関と連携され、研究を進めるとともに、具体的な活動を展開されていることは理解できた。研究の成果がどのような形であれ、末端においても感じられるようになってほしい。
● 教育・社会への還元が今後の課題。

＜社会貢献＞ 76.8点

●（高齢者アカデミーについて）高齢者の自己能力を高められる。意欲の湧くことで元気につながる。
●（公開講座について）学びたい人に広く公開され、知りたい人を受け入れ、地域に開かれた講座の増加が望まれる。

＜総合評価＞ 78.3点

● 外部評価の透明性が非常に高い。
● COC事業の検証が真剣にされていることが伝わった。
● いろいろな取組を続けないと成果は見えてこないので、長く続けて取組むことが必要である。
● 報告を大々的に（一般市民も知れるように）してほしい。
● 今後も地域に貢献できるように自分自身活動に参加していきたい。

評価基準

A（4点）：十分成果があがっている
B（3点）：成果があがっている
C（2点）：成果が十分にあがっておらず、改善の余地が多い
D（1点）：成果がほとんどあがっておらず、抜本的な見直しが必要

※平均値を100点満点換算した値を記載しています。

■ 京都府南部地域まちづくりミーティング

様々な年齢、立場の方にご参加いただき、「教育・研究・社会貢献」毎に、「評価 / 課題 / 提案」について、付箋に書き出し、グループミーティングを行いました。その後、今後、COC/COC＋事業で取組みたいことについて、意見を出していただきました。

＜評価＞

● COC事業は、補助期間終了後も継続して欲しい。
● 様々な立場や年齢の方が大学に出入りしているのがすごい!
● 地域を学ぶ授業があって、うらやましい。
●「宇治学」は、先駆的な取組。子どもだけでなく、大人も関われると良い。
● 宇治市高齢者アカデミーの展開が広がっている。

＜課題＞

● COC事業がまだまだ地域住民に知られていないと感じる。
● 地域と大学の研究は非常にいい制度だが、必要としている現場の人にもっと情報を届けることが大事と思う。
● もっと学生と地域が関われるといい。
● 社会人が学べる講座が少ないので、もっと増やして欲しい。

＜提案＞

● 出前講座など、出向いて講座等を行う。
● 学外で、研究の報告会を行い、現場の人にもっと参加してもらう。
● 研修の一環として、行政職員と学生、アカデミー生が相互に学び合う仕組みづくり。
● つながりをつくるため、今回のような機会を継続・定期的に実施する。

＜取組みたいこと＞

● 課題共有や地域ニーズを吸い上げ、地域や学生、アカデミー生が一緒に活動する（まち歩きや防災マップづくり等）。
● 地域でのアカデミー生による講座の実施。
● 学生が地元企業に就職するために、地元企業や行政と一緒に説明会などを行う。

京都文教大学COC事業

外部評価委員からの評価／評価を受けて

パネルディスカッション（公開型外部評価委員会）やその後の外部評価委員会（非公開）、評価票にて、外部評価委員の方々からいただいた評価、課題点をご紹介いたします。

【評価できる点】

● COC事業は、市民・行政の皆さんの理解やパワー、さらに、大学としても地域に応えるような先生、それらが全て集まっていなければうまくいかない。京都文教大学は全国的に見ても、かなりのレベルでできている**優良な例**だと思う。
● まちづくりにとってとても大事なのは、**信頼関係**。大学と地域、先生と若い学生さん・シニアの学生さん、それから大学と行政、関係作りがとても丁寧にされていて、それがあるからこそ様々な教育・研究・社会貢献がうまくいっているのではと感じる。
● 事業が３年目を迎え、**量的な取組から質的な取組に変化し**、体系的に取組まれている。
● それぞれの取組において、**事業効果を高める工夫、そして検証する工夫**が随所に施されており、COCの役割が機能するように設計されている。貴学のCOC事業の取組は、小規模中規模大学のロールモデルとして高く評価できる。
● 新事業を持続し、展開するには、開始時の二倍も三倍もの情熱と努力が必要である。その意味で、貴学が、地域の様々な力を引き入れ、融合し、**協働力を持続し**取組んでいることは高く評価できる。

【課題点】

● 公開の場で、一般市民からの意見表明が聞ければなお良かった。アンケート調査を行っていたが、学外者だけではなく**学内の教職員にも率直な意見を**提出していただければ、不特定多数の学内関係者による内部評価にもなるのではないかと思った。
● 京都文教大学が関ることでどう**変化**していっているのか、**検証**が必要。
●「地域入門」や「地域インターンシップ」等で提供しているテーマが、**学生の学びの実態・ニーズ**に合っているのか。
●「地域がこうあってほしい」という**地域理念に関して、評価基準**がさらに明確にされる必要があるのではなかろうか。たとえば3年前に比べて、地域の「開放度・交流度」はどれだけすすんだか、逆に「閉鎖度や孤立度」が一部で進んでいないか。「多様性や安定性や発展性」はどう進んだか、などである。
● **まちづくりというのは住民が中心**になるべきもの。地域住民が中心になりつつ、行政、大学との3者で続けていくことが必要。
● 教育・研究・社会貢献、どのアプローチから始まったとしても**全ては繋がっていて、決して別々に解決できる問題ではない**のだと言うことを学生に理解してもらう為のCOC事業であって欲しい。

■ 評価を受けて　今後の展望

京都文教大学　学長：平岡 聡

早いもので、本学のCOC事業も今年で３年目を迎えた。外部評価委員からはおおむね高い評価を受ける一方で、さまざまな課題も見えてきた。評価するには基準が必要であるが、学生・教員・地域のそれぞれがどうなることを理想とするのかについて、評価基準をさらに明確化しなければならないだろう。外部評価委員からの指摘にもあるように、「開放度・交流度」や「多様性・安定性・発展性」等の観点を取り入れ、本事業が大学内での自己満足に陥らないような工夫が必要だ。

また本COC事業には、今年度よりCOC＋事業も加わった。これは「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」であり、「京都創生人材育成」が大きなミッションとなる。つまり、地方（本学の場合は京都府南部地域）の雇用創出と、若者の地域定着を目指さなければならない。COC事業で築いた地元との信頼関係をもとに、COC事業の「ともいきキャンパス」で育てた地域人材を、COC＋事業では地域への雇用へとつなげていくことになる。

そのための方策として次年度以降は、地域インターンシップの受講生を増やし、地元の中小企業とのマッチングや就業意識の向上を図らなければならないし、地域ニーズに即したキャリア教育も充実させる必要がある。また本学の取組に共感される企業には「京都文教ともいきパートナーズ」となっていただき、インターンシップ・合同説明会・PBL授業の協働などを企画しているが、そのためには、行政・経済団体とも密接な関係を構築し、大学・企業・行政等の三位一体の体制が必要となる。このような取組をベースに、京都府南部地域における就業支援体制を整備し、企業と学生とのミスマッチを解消し、COC＋事業も充実させなければならない。

こうして雇用創出と若者定着の実現により、地域およびそこに暮らす人々がともに生き生きする「ともいき」を実現できれば、本学の建学の理念とCOC＋事業は見事に融合するだろう。